

機関番号：32670

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20320064

研究課題名（和文） 『母語話者視点』に基づく解放的語用論の展開：諸言語の談話データの分析を通じて

研究課題名（英文） Towards Emancipatory Pragmatics: Discourse Analyses from Native Speaker's Perspectives

研究代表者

藤井 洋子 (FUJII YOKO)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：30157771

研究成果の概要（和文）：この3年間の研究成果は、(1) 2009年3月、2011年2月の東京国際ワークショップにて、「場の理論」についての理解を深められたこと、(2) アラビア語のデータ収集とその分析をしたこと、(3) 国際語用論学会にて、日本語と英語とアラビア語の比較研究を発表したこと、(4) 2009年に Journal of Pragmatics の『解放的語用論』特集号第一号を発行できたことなどが主な成果といえる。

研究成果の概要（英文）：The main outcome of this three-year projects can be summarized as follows: (1) the wider dissemination of Ba-theory via two lectures by two ba-theory specialists at the Tokyo International Workshops in 2009 and 2011; (2) the creation of new data collections and analyses of Libyan Arabic; (3) the presentation of a comparative study of Japanese, English and Arabic at the 11th International Pragmatics Conference; (4) the publication of the first Special Issue of Emancipatory Pragmatics (Journal of Pragmatics Vol. 41) in January, 2009.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
2009年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2010年度	6,300,000	1,890,000	8,190,000
年度			
年度			
総計	16,000,000	4,800,000	20,800,000

研究分野：人文学（言語学）

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：解放的語用論、母語話者視点、ミスター・オー・コーパス、場の理論、インターアクション、わきまえ、アラビア語データ、西洋理論と非西洋理論

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成18・19年度に研究助成を受けた科学研究費基盤研究（B）（「文化・インターアクション・言語に関する実証的・「解放的」理論の展開」：18320069 井出祥子代表）の延長

線上に位置する。この研究においては、西欧の言語・文化に依拠して構築された従来の言語・語用論理論を、アジア、アフリカ、メソアメリカ地域の言語・文化を視野に入れて検討し、欧米主導の理論的パラダイム

からの「解放的」(Emancipatory)理論の提案を目指してきた。

従来の語用論研究や談話分析においては、単文を越えたテキスト内部の体系性が分析の中心となっている(Halliday & Hasan 1976; Austin 1962; Grice 1975; Sperber & Wilson 1987)。このような概念を所与のものとして受け入れることで、「談話する」ことの文化的規範や歴史的意義への配慮は分析の射程外とされてきた。同時に研究者は、発話は個人の自由意図によって達成され、言表内容をもとに解され、テキストを通じて分析可能であるという立場を堅持してきた。それゆえ、テキストを超えたジェスチャー／パラ言語的な側面や相互行為に焦点をあてた理論化の試みはまだ発展的段階にあり(Ochs, Schegloff, & Thompson 1996)、まして比較文化的側面への言及は皆無に等しい状況である。ただし、文化間の言語行動が共通の動機付けや目的に基くかどうかは単純な対照分析で見えてくるものではない。各文化の依拠する言語イデオロギー(Woolard et al. 1998)を十分に踏まえたうえで、母語話者の社会通念や文化・歴史・宗教的経緯をも射程に収めることで初めて可能となる。

談話の言語間比較を可能にしてきたデータには、これまでもPear Story (Chafe 1980)やFrog Story (Berman & Slobin 1994)などがあるが、これらは音声データの書き起しに基づく意味・文法分析に主眼を置いており、言語・文化的な考察は分析の射程外であった。そこで、本研究の前身では、インタラクションにおける社会的変項(人間関係における上下・親疎)をデータ収集のデザインに組み込み、言語間比較までを見据えた日本語・英語・韓国語・アラビア語における課題遂行対話、ナラティブ、自由対話の映像コーパス(「ミスター・オー・コーパス」)を作成している。

2. 研究の目的

本研究においては、「解放的語用論」の理念を通じて「母語話者」の世界観とその背後に潜む言語イデオロギーまでも包含した、「持続可能」かつエコロジカルな学問のあり方の提示を目的とした。具体的には：

- (1) 従来の西欧理論ではカバーできない現象を各分担者の研究領域より抽出し、母語話者の視点から、対象言語・文化に顕著な言語イデオロギー(日本の「わきまえ」、「和」、中国の「陰陽思想」、イスラムの「長幼の序」に相当する概念)を抽出する。
- (2) 対象言語において抽出された概念の個別性と普遍性が、どのような文化的実践を通じて構築されるのかを、日本を含むアジア

地域言語、英語などの西欧言語、またアジア以外の非西欧言語との三角測量により検証する。

(3) 上記(2)における知見から、言語とインタラクションのパターンを形成する文化・歴史・宗教的要因を特定し、「場」の概念のような、母語話者の直感に即した語用論モデルを提案する。

3. 研究の方法

研究方法は、個々の構成員による「個別研究」と全体での「共同討議」からなる2本立てである。

- (1) 「個別研究」の資料は、固有および共通データ(「ミスター・オー・コーパス」)から成る。固有データの収集は各研究者に任されているが、共通データは本研究組織の前身によりかなりの部分が収集済みである。
- (2) 「共同討議」では、各自の研究成果を(文字通り世界各地から)持ち寄り、グループ内での共有化と外部の専門家を交えた討論を通じて理解を深め、汎用性のある言語的／語用論的理論の礎を築く。

4. 研究成果

3年間を通し、上記の研究方法により、個別研究を遂行すると同時に、全体として、(1)「場の理論」への理解を深められたこと、(2)リビア・アラビア語のデータ構築が実現したこと、(3)国際学術雑誌に本プロジェクトがかねてより標榜してきた「解放的語用論」の特集号をくむことができたこと、が大きな成果として挙げられる。以下に、これらについて報告する。

(1) 場の理論と語用論について

本プロジェクトでは、交付年度以前から「解放的語用論」を標榜し、欧米の言語文化の背景下に生まれ、普遍的とされている語用論理論から解放された語用論の枠組みを求めて実証研究を行ってきた。

本研究期間中に、既に収集済みの比較可能な談話データ、ミスター・オー・コーパスを比較言語文化的に分析し、比較談話の結果の知見を得たが、その過程で、英語と日本語を比較して見られる談話現象の相違の裏には、異なる現象に通底する言語使用を支配する行動習慣(ハビタス)がそれぞれの言語にあることが分かった。つまり、英語での談話には、話者が個として発話意図を命題内容として伝える傾向が強いのに対し、日本語談話では、話者は、命題の明確な発言というより相手との融合を志向するやりとりの談話の特徴が見られた。この

相違の源はどこにあるのか探った結果、英語の談話は、西欧で発展した個の意思を尊重する近代化の影響を色濃く反映した談話行動であるのに対し、日本語の談話は、日本人の伝統的文化としての和を尊重する行動習慣（ハビタス）の産物であると考えられた。前者を、個を尊重する近代化社会、合理主義の科学的産物であるすると、後者は、それとは全く異なる思考の枠組みがなくては解釈不能である。そこで、前者の個人主義に基づく枠組を補完する枠組みともいえるべき、個よりも類としての人間を思考基盤とする「場の理論」が解放的語用論の理論の一つの可能性として考えられた。

平成 20 年度には、場の理論の提唱者である清水博氏（東京大学名誉教授）、平成 22 年度には『場所の哲学』の著者大塚正之氏（早稲田大学教授）を国際ワークショップに招き、講演とその後の討論を通じ、場の理論について基礎的知識とその意義の理解を深めた。

日本語には、欧米の常識では不可思議に思われる語用論現象があるが、その代表的なものの一つは、人称詞である。自分を指すことばと相手を指すことばが同一であることが見られることへの説明は、「二重生命」という自他不分離の仮説を持つ「場の理論」によってのみ説明が可能となる（藤井 2011）。また、日本語での課題遂行談話において、二人が合意を形成するプロセスを「場の理論」に基づく方法で分析を試みた。これまでの科学的思考方法の前提とは異なる前提として、①研究者が外的視点で談話現象を客観的に見るのではなく、話者の立場に立って内的視点でデータを観察する、②話し手は、自己中心的自己と場所的自己という二重構造からなると考える、③談話の場は、静的なものではなく刻々と変化する即興劇にたとえられると考える、④コミュニケーションは、明在的コミュニケーションだけでなく、その陰にある暗在的コミュニケーションによって支えられている、の 4 点を場の理論から抽出した。この前提に基づく分析を行うことで、第一に談話が対話的なものから融合的なものへとシフトするダイナミックな相互作用として捉えた。また、融合的談話において対話者が自他融合する際に、ものがたりの合意形成が進むことも明らかになった。これは、研究者が話し手の内的視点に立つことで得た知見であり、既存の談話分析とは一線を画する談話の解釈を可能にした。（井出・植野 2010）。

(2) アラビア語対話データ収録と分析

①アラビア語 ミスター・オー・コーパス収録
言語使用者の文化的背景が対話進行に与え

る影響をより広い範囲で実証的データに基づいて調査検討する目的で、アラビア語でのミスター・オー・コーパス収録を行った。収録に際しては、異なる言語・文化背景を通じて可能な限り統一的な比較を可能とするために、日本語話者および英語話者を対象として既に収集した ミスター・オー・コーパスに準拠して対話課題を設定した。データ収録は、リビア(大リビア・アラブ社会主義人民ジャマールヒーヤ国)セバ大学のメイヨフ教授の協力を得て、セバ大学において実施した。

収録日時: 2008 年 10 月 13-15 日

収録場所: Sebha 大学、Libya

参加者: Sebha 大学の教員・学生 27 ペア
(全員女性)

対話課題: 物語構成課題、ナラティブ課題、自由対話課題

収録情報: ビデオ収録、音声収録

対話収録ビデオ画面の一例を図 1 に示す。



図 1. アラビア語ミスター・オー・コーパスビデオ画面の一例

② アラビア語対話の分析

アラビア語ミスター・オー・コーパスの物語構成課題対話を対象として、セバ大学のメイヨフ教授とともに、アラビア語対話の特徴分析を行った。分析では発話末の談話モダリティ表現"sah"および"bahi"を取り上げた。"Sah"は単独では"correct"の意味を持つが、発話末に用いられると、"sah"の付された発話によって表明された命題に対して対話相手の同意/不同意を確認する機能を持つ。それに対して、"bahi"は単独では"good"の意味を持つが、発話末に用いられると、"bahi"の付された発話によって表明された命題に対して話し手は聞き手の同意を前提としていることを表示する。これら談話モダリティの使用には教員-学生ペアと学生-学生ペアとで大きな差異が観察された。教員-学生ペアでは、"bahi"は上位者の教員から下位者の学生に向けてのみが利用可能であり、下位者の学生が上位者の教員

に向けて用いることは無かった。"Sah"は上位者、下位者のいずれも用いるが、下位者から上位者への反対表明は、上位者からの"sah"の機会をとらえて下位者が上位者の意見に対して間接的に反対を表明する形態をとることが観察された。このようにアラビア語での対話行動選択では、対話参加者間の年齢や社会的地位に基づく上下関係が大きな要因となっていることが示された。

(3)かねてより編集を進めてきた国際学術雑誌、*Journal of Pragmatics* の第41巻に「解放的語用論」の特集号第1号を組み、発行することができた。引き続き、特集号第2号、第3号の編集に取りかかっている。これにより、「解放的語用論」という、非西欧の言語文化に依拠した新しい語用論を国際的に発信する第一歩を踏み出すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 29 件)

- ① 藤井洋子 「日本語の人称詞・親族呼称に見る自己と他者の位置づけ—相互行為の文化心理学的考察—」*日本女子大学文学部紀要* 60号. 73-86. (2011) (査読無)
- ② 片岡邦好 「言語相対論とその系譜(3)」『*愛知大学英文会誌*』16号. 16-34. (2011) (査読無)
- ③ 片岡邦好 「空間関係の構築における『場の交換』と間主観的視点」『*ことば工学研究会資料*』37巻. 15-26. (2011) (査読無)
- ④ 植野貴志子 「日英語会話における疑問表現の社会言語学的考察—英語コミュニケーション教育のために—」『*日本女子大学大学院文学研究科紀要*』17号. 1-15. (2011) (査読無)
- ⑤ 片岡邦好 「言語相対論とその系譜(2)」『*愛知大学英文会誌*』15号. 54-72. (2010) (査読無)
- ⑥ Kataoka, Kuniyoshi. A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 2): Catchment, prosody, and frames of reference in Japanese spatial narrative. *Language & Communication* 30 (2). 69-89. (2010) (査読有)
- ⑦ Kataoka, Kuniyoshi. Verbal and nonverbal repetition by Japanese first-aid instructors. *Proceedings of The CHAT (Center for Human Activity Theory) Workshop on "Language Learning and Socialization through Conversations," Center for Human Activity Theory, Kansai University*. 27-37. (2010) (査読無)
- ⑧ 阿部圭子 「日本語と英語、『説得』に向いている言語はどちらか?」『*英語教育* 9月号』大修館書店 Vol. 59, No. 6: 24-25. (2010) (招待)
- ⑨ 片桐恭弘・高梨克也・石崎雅人・榎本美香・伝康晴・松坂要佐 「会話における合意形成と相互信頼感形成」*人工知能学会 SLUD 研究会資料*. (2010) (査読無)
- ⑩ Kim, Myung-Hee and Yoko Fujii. Story co-construction and establishment of mutual consent: convergences and divergences between English, Japanese and Korean. *Congress Book of the 18th International Congress of Linguists: 3572-3586*. (2009) (査読有)
- ⑪ Fujii, Yoko. A study of the situation of *self* in the interaction of conducting of problem-solving tasks: A difference between Japanese and American pairs. *日本認知言語学会論文集 第9巻: 608-611*. (2009) (査読無)
- ⑫ Hanks, William, Sachiko Ide, and Yasuhiro Katagiri. Edit the Special Issue of Towards Emancipatory Pragmatics. *Journal of Pragmatics* 41. (2009) (査読有)
- ⑬ Hanks, William, Sachiko Ide, and Yasuhiro Katagiri. Introduction: Towards an emancipatory pragmatics. Special Issue for Towards Emancipatory Pragmatics, *Journal of Pragmatics* 41: 1-24. (2009) (査読有)
- ⑭ 井出祥子 「日本のことば遣いに見られる仏教思想の影響」『*現代と親鸞*』第17号: 53-91. (2009) (招待)
- ⑮ 井出祥子 「サステイナブルな地球のための異文化コミュニケーション—個人主義の論理と場の論理—」『*異文化コミュニケーション論集*』第7号: 11-24. (2009) (招待)
- ⑯ 片桐恭弘・井出祥子 「より豊かな言語理論の構築に向けて」『*月刊言語*』第38巻12号: 6-7. (2009) (招待)
- ⑰ 井出祥子 「認識論から存在論の言語学へ: 場の言語学への招待」『*日本英語学会大会論文集*』201-206. (2009) (招待)
- ⑱ Kataoka, Kuniyoshi. A multi-modal ethnopoetic analysis (Part 1): Text, gesture, and environment in Japanese spatial narrative. *Language & Communication* 29

- (4): 287-311. (2009) (査読有)
- ①⑨ 片岡邦好 「口語的手紙文における字体と絵文字の指標的特性—その特殊性と普遍について—」『論集: 異文化としての日本』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科): 103-112. (2009) (査読有)
- ②⑩ Kim, Joung-Min and Kaoru Horie. Intersubjectification and Textual Functions of Japanese *Noda* and Korean *Kes-ita*. In: Takubo, Yukinori (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 16. Stanford: CSLI, 279-288. (査読有)
- ③⑪ Fujii, Yoko. What causes differences in the process of mutual consent?: A comparison of story co-construction by Japanese and American pairs. 『文化・インターアクション・言語に関する実証的・「解放的」理論の展開』平成 18 年度～19 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)) 報告書. 104-120. (2008) (査読無)
- ④⑫ Fujii, Yoko. A study of the situation of self in the interaction of conducting of problem-solving tasks: A difference between Japanese and American pairs. 日本認知言語学会第 9 回大会予稿集. 37-40. (2008) (査読無)
- ⑤⑬ Matsusaka, Yosuke, Yasuhiro Katagiri, Masato Ishizaki, and Mika Enomoto. Unsupervised clustering in multimodal multiparty meeting analysis. *Proceedings of the International Conference on Language Resources and Evaluation*, 27-31. Workshop on Multimodal Corpora. (2008) (査読有)
- ⑥⑭ Katagiri, Yasuhiro, Yosuke Matsusaka, Yasuharu Den, Mika Enomoto, Masato Ishizaki, and Katsuya Takanashi. Implicit proposal filtering in multi-party consensus-building conversations, SIGDIAL, 9-16. (2008) (査読有)
- ⑦⑮ 片岡邦好 「『相对枠』言語における絶対性: 道案内談話における絶対的指差し」『文明 21』No. 21: 1-21. (2008) (査読無)
- ⑧⑯ Kataoka, Kuniyoshi. "Involved" speech style and deictic management of spatio-temporal and textual reference: A case of *ko/so*-deictics in Japanese. In Jones, Kimberly and Tsuyoshi Ono (Eds.), *Style Shifting in Japanese*, 251-284. Amsterdam: John Benjamins. (2008) (査読有)
- ⑨⑰ 堀江薫・金廷珉. 「主観化・間主観化」の観点から見た日本語・韓国語の文法現象 — Elizabeth C. Traugott 教授の文法化研究の新展開 —」『言語』37 巻 2 号, 84-89. (査読無)
- ⑩⑱ 堀江薫 「間主観化」『言語』37 巻 5 号, 36-41. (査読無)
- ⑪⑲ 阿部圭子 「助言のディスコース」『開放系言語学のすすめ』唐須教光(編) 慶應義塾大学出版会. 121-140. (2008) (依頼)
- [学会発表] (計 11 件)
- ① Fujii, Yoko. Addressing the self and the other in Japanese: An interpretation in terms of the pragmatics of 'Ba.' Workshop on Comparative Pragmatics. MPI, Nijmegen, Netherland. (2010)
- ② Ide, Sachiko. August 6, Keynote speech: The co-creation of a story in discourse: A *ba*-theory based approach as a step toward an ecological study. The 2nd International Conference on Language and Communication, NIDA, Bangkok, Thailand. (2010)
- ③ Ide, Sachiko. November 6, Invited to the symposium on "Linguistics of 'ba' ," How and why two strangers can co-create a story: Application of the 'ba'-theory based approach to the discourse. PACLIC 24. (2010)
- ④ 井出祥子・植野貴志子 「場の論理から見た日本語の語用論」神戸大学シンポジウム「日本語研究の視点」. (2010)
- ⑤ Katagiri, Yasuhiro. Cultural parameters in interaction. First International Workshop on Agents in Cultural Context. Kyoto University. (2010)
- ⑥ Katagiri, Yasuhiro. An evolutionary perspective on cultural variations on human interactions. Workshop on Comparative Pragmatics. MPI, Nijmegen, Netherland. (2010)
- ⑦ Katagiri, Yasuhiro. An evolutionary perspective on cultural variations on human interactions. Workshop on Comparative Pragmatics. MPI, Nijmegen, Netherland. (2010)
- ⑧ Kataoka, Kuniyoshi. Gestural repetition as cultural practice in Japanese CPR (Cardio-Pulmonary Resuscitation) discourse. Workshop on Comparative Pragmatics. MPI, Nijmegen, Netherland. (2010)
- ⑨ Abe, Keiko. A comparative study of persuasion discourse in English and

Japanese. Workshop on Comparative Pragmatics. MPI, Nijmegen, Netherland. (2010)

- ⑩ Abe, Keiko. Cross-cultural differences in advice giving by Japanese and English speakers. 日本英語学会シンポジウム. (2009)(招待)
- ⑪ Takanashi, Katsuya, Mika Enomoto, Yasuharu Den, and Yasuhiro Katagiri. Non-reactivity in reactive tokens, International Conference on Language, Communication and Cognition. Brighton, UK. (2008)

[図書] (計3件)

- ① 堀江薫・金延珉「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化—機能主義的類型論の観点から—」『歴史語用論入門』高田博行他(編)193-207. 大修館書店. (2011)
- ② 金延珉・堀江薫「『のだ』構文の談話機能に関する対照言語学的考察—韓国語の『KES-ITA』との対比を通じて」『言語学と日本語教育VI』南雅彦(編)175-190. くろしお出版. (2011)
- ③ 堀江薫・バルデシ・プラシャント『言語のタイポロジー—認知類型論のアプローチ—』研究社(「認知言語学のフロンティアシリーズ」5巻). (2009)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤井 洋子 (FUJII YOKO)
日本女子大学・文学部・教授
研究者番号：30157771

(2) 研究分担者

井出 祥子 (IDE SACHIKO)
日本女子大学・文学部・客員研究員
研究者番号：60060662

阿部 圭子 (ABE KEIKO)
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号：90231951

片岡 邦好 (KATAOKA KUNIYOSHI)
愛知大学・文学部・教授
研究者番号：20319172

片桐 恭弘 (KATAGIRI YASUHIRO)
公立はこだて未来大学・システム情報科学部・教授
研究者番号：60374097

堀江 薫 (HORIE KAORU)
名古屋大学大学院・国際言語文化研科・教授
研究者番号：70181526

植野 貴志子 (UENO KISHIKO)
日本女子大学・文学部・助教
研究者番号：70512490

(3) 連携研究者

菅原和孝 (SUGAWARA KAZUYOSHI)
京都大学大学院・人間・環境学研究科・教授
研究者番号：80133685

石崎 雅人 (ISHIZAKI MASATO)
東京大学大学院・情報学環・教授
研究者番号：30303340